

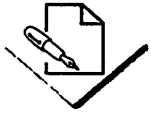
やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2004年 8月号 / 250円

編集部より	2
人間性	3
スーフィズムの起源	4
ドゥア（祈り）のある毎日へ	7
「ヒジャーブ」	8
今月のハディース「罪に抵抗する時の忍耐」	12
預言者ムハンマドを語る「預言者たちの風格第6回」	13
「レシピコーナー」「にんじんのスープ」	14
「ある手紙より」	15
聖クルアーンと科学 「地球の軌道」	17
リサーレイヌール 「人間と世界の本質 第4回」	18
映画から考える：「赤ちゃん泥棒」 Raising Arizona	21
「女性と男性」	23
「完璧を目指して」	24
「カレッジの小石うちいさなわたしの、オクスフォード旅行記①」	25
詳しく学んでみましょう 『合同礼拝』	26
「フェトウツラー・ギュレンとローマ教皇の会見」を読んで第2回	27
「サハーバ（預言者の教友）物語」より「ハキム・ビン・ヒザムの抑制」	28



思春期に入る手前だったでしょうか。私は服装や性格が男の子っぽい子供で、次に生まれ変わるなら男がいいなあとよく願望したものです。‘男と女、どちらがいいか’と考えるのはなにも子供の無邪気な空想にとどまらず、むしろ大人になるにつれて目先の損得勘定も入ってくるようになります。何事も金銭に置き換えて価値を計りがちなこの世ではしかるべき傾向かもしれません。しかし特に女性にとっては生得的にも社会的にも人生の様々な節目でその後の進路を左右するような場面に遭遇し、単純な良し悪しを超えて自らの女性性と向き合う機会が多いように思われます。主なものとしては結婚・仕事を巡るタイミングやパートナーの選択、出産・子育ての位置づけ、老親の介護等々が挙げられるでしょう。

自分にとっての本当の幸せとは何か、この世に生まれてきた理由、与えられた役割とは。何かのきっかけとともに、普段は気にも留めずやり過ごしてしまう自己の存在の本質を問う想念もまざまざと浮かび上がってきます。社会一般の状況、時代が生み出す価値観、他人からの評価、一人よがりな自我・・・私たちは様々な色眼鏡の囚われとなり、時には囚われている状態にも気付かず、明確な判断基準や覚悟を持ち合わせていなければ何を納得して選び取るべきかを見失いがちです。

私たち人間は自明のごとく、一人一人が差異を持ってこの世に存在します。また誰もが家族や組織など社会を構成する一員として補完的に存在しています。つまり役割の差こそあれそれは優劣の別ではなく、誰かが欠けてもどこかが影響を受けることになるのです。「女性」であることもある意味そのような差異のひとつに他ならず、性差としての女性と男性は大局的には互いを補助し合いより良い幸福を追求するための存在であると言えます。それには男性の協力も欠かせませんが、女性自身も作られたイメージや余分なこだわりを捨て、人間的な感情と社会的存在としてのバランスをとりつつ差異としての女性性を認識しなおすところから、無理のない自然な姿、やすらぎを新たに見出せるのではないかと思います。

さて、この「やすらぎ ～人と人をつなぐ月刊総合誌～」も8月号から創刊3年目に入ります。編集部一同、内容のさらなる発展と充実に向けてまいりますが、読者の方々のご意見をより反映させていけたらと願っております。掲載内容に関する疑問点や質問、感想など、今後もお寄せくだされば幸いです。

* 表紙絵担当者より：女性は自分の子供を育てるだけでなく社会を育てます。



人と付き合う中で、何があなたを喜ばせ何が気を悪くさせるかということを行行動基準として常に考えなさい。あなた自身の自尊心が願うことを他の人にも望んであげなさい。そしてあなた自身を不快にさせる行動は何であれ他人も不快にさせることを忘れないようにしなさい。以上のことに従えば、あなたは間違った行動や態度を取らないで済むだけでなく他人を傷つけることから免れるでしょう。

人から親切にされたり好意を受けると、あなた自身、相手の方に対して好意を寄せたり親愛の情を持つようになるでしょう。同じように他人がどうやったらあなたを好きになってくれるか、親愛の情を寄せられるようになるのかを理解しなければなりません。「人は施された好意の奴隷である」と言われます。ゆえに他人に対して好意を持って接し親切にすることは、相手側から傷つけられる可能性を限りなく少なくする有効な防衛手段となり得るのです。

精神面での成熟度・完全性を計る物差しは、ひとえにあなたが他人、特にあなたを不当に扱った人物に対してどのように対処するかにかかっています。悪に対しては善をもって応えなさい。人のためになることをやり続けなさい。たとえ相手があなたに危害を加えた人物であったとしてもです。もっと言えば高潔さを保ち慈悲をもってその人に接しなさい。他人を傷つけるのは粗野な振る舞いだからです。悪に対し悪でもって応えるのは人格に欠点がある証拠です。悪に善で応えることこそ高潔の印なのです。

他人に施す善行に限度はありません。人類のために献身し、徹底した利他の立場から、他人のために自身の命を犠牲にする人さえいるでしょう。しかしそのような利他主義は、誠意と純粋な意図に起因する場合にのみ、そして相手を民族や人種の区別なく扱った場合にのみ偉大な美徳であると言えるのです。

私たちが示す親切さや高潔さは、友人関係における親密さや友情が維持される度合いに直接比例します。人間関係の中で温かみも親しみも感じさせないのに高潔さや親切を語ってもそれは口先だけの話です。良いことをしてもらった時だけ良いことを返したり、相手を罰するために時に親切にするのをやめたりするのは道徳心の欠損や未成熟さの現れです。

時には相手の欠点や間違い、不作法に目をつぶり、相手の不完全さを許容することができれば、それはその方に対して寛大さと善良さをもって接してあげることにもなります。他人事を詮索したり人の欠点をあら捜ししたりするのは失礼で不作法なことですし、ましてやそのような事柄を別の人に公表することは許されざる行為です。このような行いによって人々の結束力は深刻な打撃を受け、悲しむべきことに友情が完全に回復するのはほぼ不可能となるでしょう。

他人に対して自分が施した最大限の好意を取るに足りないものとみなす一方で、自分自身が浴した恩恵はごく些細なものであっても心底感謝する人は、行動面で神の基準に達し良心に平安を見出している大成した人です。このような人は他者にもたらした恩恵をわざわざ思い出させるようなことはしませんし、他人が自分自身に無関心だと思えても不平不満を漏らすことはありません。



スーフィズムの起源

イスラーム宗教学の歴史が示すように、宗教的戒律はイスラーム初期に書き記されたものではありません。むしろ、信仰・崇拝・日常生活に関した戒律の実践と口伝による継承の繰り返しによって、人々はそれを記憶してきたのです。

それまで記憶されてきたことや実践されてきたことを単純に書き記したので、後にそれらを本にまとめるのは難しいことではありませんでした。その上、宗教的戒律はムスリム個人の生活また集団生活にとって不可欠な問題であったので、学者たちはそれらを優先して本にまとめました。法学者たちはイスラーム法と人生のあらゆる分野に関する規則や原則をまとめて本にしました。伝承学者たちは預言者の伝承（ハディース）や預言者の習慣（スンナ）を明確にし、それを本に残しました。神学者たちはムスリムの信仰に関する問題を扱いました。クルアーンの解釈学者たちは、後に「クルアーン学」と呼ばれるようになったナスフ（法律の廃止）やインザール（アッラーが全クルアーンを一度に啓示されたこと）、タンジール（アッラーがクルアーンの一部を出来事の度に啓示されたこと）、キラーア（クルアーンの詠唱）、タウィール（解釈）などをはじめとして、クルアーンの意味について研究することに専念しました。

ムスリムの世界では万人に認められ感謝されているように、こうした努力のお蔭でイスラームの真実や原則がその信憑性を疑われることなく確立されたのです。

「外面的」行為について研究する学者がいた一方で、スーフィーたちはおもにイスラームの純粹な精神的側面に焦点を当てました。外面的側面の周囲に存在する真実に目を向けるように呼びかけながら、人間の存在の本質や、森羅万象の真の姿、人間と宇宙の内なるエネルギーなどを明らかにしようとし、クルアーンの解説や、伝承、法学的推論に加えて、スーフィーたちは禁欲主義や精神性、自己浄化といったような自分たちの宗教実践と経験を通して自分たちの道を確立していったのです。

つまり、イスラームの精神生活は禁欲主義、日常の崇拝行為、大きなまた小さな罪の忌避、意志の誠実さや純粹さ、愛や切望、そして個人が本質的に無力であり完璧でないと認めることに基づくものであり、スーフィズムは、それを独自の方法・原則・規則・条件で追求しました。たとえ後に定められた規則の違いが次第に明らかになったとしても、この学問の核となっているのはイスラームの本質だと言うことができるのです。

シャリーアの戒律とスーフィズムは同じイスラームの二つの側面なのですが、時に相容れないもののように見えることがあります。スーフィズムは宗教的義務を守るための禁欲主義、自己抑制、自己批判、そして悪魔のささやきや世俗的な誘惑に抵抗し続けることなど、シャリーアの精神そのものなので、これはとても残念なことです。シャリーアの戒律を固守することが外面主義（イスラームを外面的側面に限定すること）とみなされる一方で、スーフィズムを実践することは神秘主義とみられてきました。シャリーアの戒律が法学者やムフティーによって示され、一方でスーフィズムの戒律はスーフィーによって示されてきたことにこの分離の一

因がありますが、これはそれぞれの個人に合った道を優先させてしまうという人間の自然な傾向が故だと考えられるべきでしょう。

多くの法学者、伝承学者、クルアーンの解釈学者たちはクルアーンとスンナに基づいて重要な本を残してきました。スーフィーたちも、預言者と教友たちの時代にまでさかのぼる方法で、精神状態についてのみならず、禁欲主義や世俗的誘惑に対する精神的奮闘に関する本をまとめました。また彼らは自分自身の精神面における経験や愛情、情熱、歓喜などについても記録しました。このような書物の目的は、宗教的実践や思考が「外面的」側面に制限されてしまっていて、それを宗教生活の「内面的」側面に導きたいと考えていると思われる人々の注意を引くことでした。

スーフィーも学者たちも宗教的義務と禁止事項を守ることによってアッラーに近付こうとしました。しかし、どちらの側でも時折見られる極端な態度が相違を引き起こしてしまうのです。実際には本質的な相違はなく、異なるテーマの下でイスラームの異なる側面や要素を扱っているだけなので、むしろ相違と捉えられるべきではありません。法学の専門家が崇拜行為や日常生活の規則に対して、また個人と社会をどのように規制し正していくかということに対して関心を払う傾向を持つということと、スーフィーが自己浄化や精神的修行を通して精神レベルの高い生き方を提供しようとするのが相違であるとは捉えられないでしょう。

事実、スーフィズムと法学は、生徒が生活の中で実践していけるようにシャリーアの二つの側面を教える一つの大学の中の二つの学部のようなものです。片方の学部が礼拝・浄め・断食・喜捨の方法をはじめとして日常生活のあらゆる側面の規則を教え、もう一方はそれらの行為やその他の行為の意味、どのように崇拜行為を自身の存在の一部とするのか、どのように個人を普遍的な完璧な本物の人間という状態にまで高めるのかというようなことに焦点を当てているため、どちらももう片方がなくてはやっていけません。そのため、どちらの学問も無視することはできないのです。

自称スーフィーの中には宗教学者たちを「儀式学者」や「外面主義者」などと呼ぶ人たちもいますが、本物のスーフィーたちは常にシャリーアの基本原則に法り、クルアーンとスンナに基づいた考え方をします。彼らは自分達の理論・方法をこういったイスラームの基本原典から引き出すのです。ムハースビーの『アル＝ワサヤ・ワ・アッ＝リアヤ（アドバイスと規則の遵守）』、カラーバーズィーの『アッ＝タアルーフ・リ＝バダッハブ・アフル・アル＝スーフィー（スーフィズムの人々の道の説明）』、トゥースィーの『アッ＝ルマー（かすかな輝き）』、アブー・ターリブ・アル＝マッキの『クトゥ・ル・クルブ（心の糧）』、クシャイリーの『アッ＝リサラ・アックシャイリ（論文）』などは、クルアーンとスンナに基づいてスーフィズムを論じている貴重な文献の代表的なものです。これらの文献の中には自己規制と自己浄化に焦点を当てているものもあり、スーフィーの様々な関心事について詳しく述べているものもあります。

これらの偉大な著者たちに続いて、『イフヤ・アル＝ウルム・アッ＝ディーン（宗教諸学の復興）』で有名なアブー・ハーミド・ガザリーが現れました。彼はすべてのスーフィズムの条件・原則・規則について見直し、すべてのスーフィーが賛成したものに関してはそれを確立し、それ以外のものについてはそれを批判することによって、イスラームの外面的側面（シャリーアと法学）と内面的側面（スーフィズム）とを一致させました。そのため、彼の後に現れたスーフィーたちは、彼ら自身といわゆる「儀式的な学者たち」との一致や合意を奨励し、スーフィズムを宗教学の中の一つ、もしくは宗教学の一側面として示しました。さらに、スーフィ

一たちは精神状態や確信・信念、誠意・道徳といったスーフィズムのテーマをマドラサのカリキュラムに加えました。

スーフィズムはおもに個人の内面世界に焦点を当て、宗教戒律の精神やその心における意味と影響を扱い、またそれがゆえに抽象的なのですが、それはクルアーンとスンナに基づいたイスラームのいかなるものにも反するものではありません。事実、他の宗教学の場合と同様に、スーフィズムの原典はクルアーンとスンナであり、またイスラーム初期における純粋な学者たちによるクルアーンとスンナから導かれたイジュティハード(推論)なのです。スーフィズムは知識、アッラーに関する真理、確信、誠意、善行、他の重要な美德などについて強調しています。

スーフィズムを「奥義や神秘の学問」「人間の精神状態の学問」または「イニシエーションの学問」と定義するからといって、スーフィズムが他の宗教学と全く異なるものだというわけではありません。このような定義はシャリーアに基づいた異なる気質・性格を持つ異なる時代に生きた様々な個人の経験から導かれたものなのです。

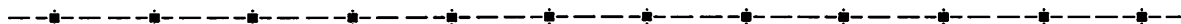
スーフィズムの考え方とシャリーア学者の考え方や結論を根本的に異なるものだと捉えるのは曲解というものです。中には狂信的なスーフィーや宗教の外面的側面のみ固執する宗教学者（法学者・伝承学者・クルアーンの解釈学者など）がいるのも確かですが、中庸のまっすぐな道を行く人たちが常に大部分を占めます。そのため、これら二つのグループの間に深刻な相違があると結論付けるのは間違いです。（これは法学者やスーフィーがお互いに関して不適当なことを考えたり発言したりすることに端を発することが多いのです。）

寛容と一致について語る人々と比べて、そのような衝突を始めたり加担したりする人はとても少数です。スーフィズムとシャリーア法学は双方とも常にイスラームの二つの主たる原典であるクルアーンとスンナに基づいているので、これは当然のことと言えます。

さらに、未だかつてスーフィズムにとって重要なことがシャリーア学にとって重要なことでなかったことはありませんでした。どちらの戒律も信仰と善行の重要性を強調しています。唯一の違いは、スーフィズムが自己浄化や善行の意味を深め広げること、モラルを高めることを強調するという点です。それは個人の心がアッラーに関する真理に気付き、そしてイスラームを生きアッラーのお喜びを求める上で必要とされている誠意への一步となる道を歩み始めることになるのです。

これらの善行によって、人々は「もう一つの心」（心の中の精神的知性）、アッラーに関するより深い知識、アッラーについて述べるためのもう一枚の「舌」を得ることができるのです。そして、意識のより深いところで、気持ちをこめて、またアッラーへの深い愛情に基づいて、シャリーアの戒律を守ることができるようになります。

スーフィズムを実践する人は、これらによって自らの精神を深めることができるようになります。自己との闘いや隔絶・隠匿、自己規制や自己批判を通して、森羅万象の内面を覆っているベールは割かれ、個人がイスラームの大きなまた小さな原則すべての真実を強く確信することができるようになるのです。





おお、称讃されるべきお方よ

おお、崇高と高貴の持ち主よ

おお、栄誉と優美の持ち主

おお、約束を守るお方よ

おお、（しもべを）許し、受け入れて下さるお方よ

おお、限り無い恵みを施すお方よ

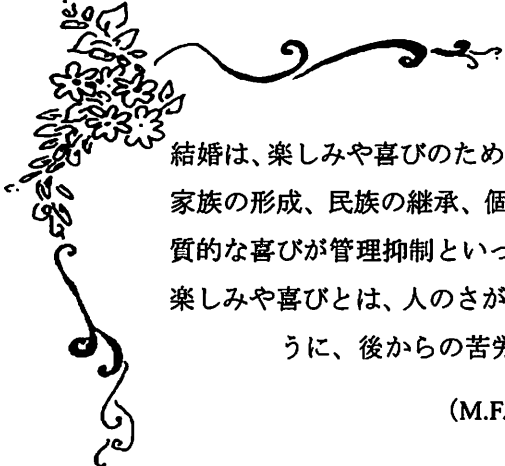
おお、判決を下すお方よ

おお、力強く、永遠なるお方よ

おお、恵みを限り無く豊かに与えるお方よ

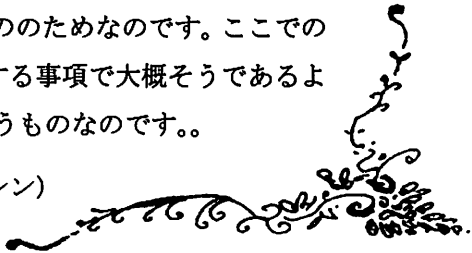
おお、余りある恩寵を与えるお方よ

- (8) あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。¹

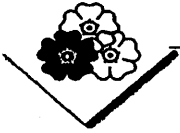


結婚は、楽しみや喜びのためのものではありません。結婚とは、家族の形成、民族の継承、個人の感情や思考の分散の防止、物質的な喜びが管理抑制といったもののためなのです。ここでの楽しみや喜びとは、人のさがるに関する事項で大概そうであるように、後からの苦勞を伴うものなのです。。

(M.F.ギュレン)



¹ 偉大なる鎮帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、教いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎮帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎮帷子のような精神的陸が必要で、本来、偉大なる鎮帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



この春の出来事だった。娘の同級生の母親（パングラデシュ人のムスリマ）が突如ヒジャーブをするようになった。

1年前はじめて彼女と出会ったとき、彼女は私が日本人ムスリム同士のカップルだと知るとおどろき、私のヒジャーブ姿を見て、「あなたは真面目なムスリマですね。私もいつかヒジャーブしたいと思っていますが、ハッジに行ったらしようと思っています」と言っていた。しかし彼女の心の中で、しだいに変化があったようだ。

同じ学校に子供を通わせているトルコ人ムスリマや私を見ているうちに、日本という非イスラーム圏に住む外国人ムスリマが自分の信仰を守って正しく生きようとする姿、日本人同士のムスリムカップルが日本でイスラームを生きる姿に心を動かされ、自分も正しく生きなければ、と求めていったそうだ。そして、知人の日本人ムスリマがある日突然ヒジャーブを付け始めた様子を見て大いに刺激になったようで、自分もいつかヒジャーブを付けるようになりたいとあこがれを持ったそうだ。そしてその数ヵ月後、彼女の心に変化があった。

彼女の父親が亡くなったのだ。葬儀のため急ぎよ帰国した。そのとき、何かを感じた。

父の死をきっかけに、生命のこと、そしてそれを授けてくださっているアッラーのことを深く考えるようになったという。そして、幼い頃、自分が受けたイスラーム教育のことを思いだした。7歳の頃からクルアーンの誦読のクラスに通っていたそうだ。自分もアッラーの道を歩みたい、信仰に生きたいと思うようになった。ヒジャーブを付けたいとい

う気持ちがあわきおこってきて、ヒジャーブを付けることを決意したそうだ。

日本に戻ってきて、まわりの日本人のお母さんたちから「どうしてヒジャーブを付けるようになったの？」と聞かれるが、信仰を持っていない人にはこの気持ちは理解してもらえないだろうと思って話さなかった、と彼女は自分の心境の変化を語った。

同席していた(長くイスラーム圏に住んでいた)フィリピン人のクリスチャンの友人から「もうヒジャーブをはずしたらダメよ」と言われると、「絶対にはずさない。私はそう決心したのだから」と笑いをもらった。そして彼女はこうも語った。「ヒジャーブを付けるようになって、アッラーが自分を守ってくれていると感じる」。娘にも信仰に生きる人になってほしいと思っているとも語っていた。そして、アッラーについての思い、彼女が好んでいるクルアーンやハディースの言葉を紹介してくれた。すでに彼女は帰国してしまい、信仰を分ち合う機会はなくなってしまったが、近くにいる人がこのように心が開かれ、信仰の道に入っていったのを見て、アッラーのなさることはすばらしいな、とアッラーの導きを感じ、とてもうれしく感じた。

それから2週間のち、思いがけず、今度はわが娘の上にヒジャーブについてアッラーの導きがあった。

ハナ(7歳)とアミナ(5歳)がヒジャーブを付けたいと言うようになった。ハナは今年の春にもヒジャーブをして学校に行きたいと言ったが、そのときは「その気持ちが1年以上続いたらね」と私がストップをかけた。今回GWにヒジャーブをつけて公

立学校に通う小学 3 年生のトルコ人の女の子に出会い、刺激されたようだ。

私としてはうれしい反面、心配もあって、まだ義務でもないし、夏の暑さにこんなに小さいうちから我慢するのは不憫だなという思いもあった。それに単なる憧れからヒジャブをつけるのではなく、よく考えて納得した上で付けてほしいと思っていて、どうしたものかと考えていた。

「いったんヒジャブをつけるようになったらおばあちゃんになるまで取らないんだよ」、「夏は暑いけど我慢できるの?」、「男の人の前で手足を出したりできなくなるんだよ。もう半袖とかかわいいスカートはいて外に出れないよ」などとけっこうネガティブなことを言ったりしたが、「わかってる。大丈夫だ」と応える。

「学校の行き帰りに以前ママに“イラク人!ここはジャパンです!”って言った子がいたように、からかったり嫌がらせをする子がいるかもしれないよ」と言うと「ママが無視したようにハナも無視する」と言う。

ついには「どうしてママはヒジャブをつけてもいいのに、ハナとアミナはつけたらダメなの?」と言われ、返す言葉もなく、とりあえず、週末試してみて大丈夫そうだったら新年度の 9 月から付けてもいいと言った。結局、次の週からつけたいというので私もついに OK した。

義務になる年頃になっていきなり付け始めるのもきついかもしれないし、後になって「もう義務だから付けたほうが良い」といっても「前にママは付けなくていいって言ったじゃん」と言われてしまうかもしれないし…。

せっかくやる気になっている今から毎日は無理でも少しずつヒジャブに慣れさせていったほうが

いいのかなと思うようになった。

子供がつけるとなると、親もそれなりに覚悟が必要になる。

子供がいまからヒジャブをつけて暑い夏にも耐えて頑張ろうとするなら、私も義務の礼拝だけでなくスナアの礼拝も欠かさずやるようにしよう、できれば深夜の礼拝もしようと、自分にももう少し困難なイバーダを課してみようと思うようになった。

別に子供とはりあって競争しているわけではないけど…。 “心の浄化” の講義も大いに刺激になった。ジャザーキアッラーフハイラン。

そしてハナとアミナは 5 月 17 日からヒジャブをして学校に行った。

「本当に今日からつけるの?暑くて我慢できなかつたらまだ義務じゃないからはずしてもいいよ。少しずつ慣れていけばいいからね」と言って送り出した。

その日は 1 日中 “皆に変な格好だと言われて嫌な目にあってはいただろうか、暑いのに我慢しているのだろうか” などと心配し、ずっとアッラーに “2 人をお守りください” とドゥアーしていた。ヒジャブ姿で元気に帰ってきたので一安心。アルハムドリッラー。

学校での様子を聞いたら、案の定皆から「どうしてつけてるの?」と聞かれ、ハナは「ママも付けているでしょ。私も付けたかったの」と応え、アミナは一言「ムスリムだから」と応えたそう。

「嫌な目にあわなかった?変な格好とか言われなかった?」と聞くと、「女の子たちはキュート!かわいい!って言ってくれたよ」

「暑いのに我慢していたの?大丈夫?明日もする

の？」と聞くと、「うん、するよ」とさりとってのけ、「ママ、何をそんなに心配してるの？ハナとアミナはやりたくて付けてるんだよ。嫌だったらずすから心配しなくてもいい」と言われ、ハッと気がついた。

“とらわれていたのは自分の方だった”と。

自分のときのことを考えると、かつてはヒジャーブにかなり抵抗感を持っていたし、世間体とか“人がどう思うだろうか”と人の眼や反応をかなり意識していた。日本(非イスラーム圏)において進路や就職のことを考えるとなおさらだと思った。それこそ一大決心をして被り始めたのだが、娘たちはまだ世間体とか人の眼とかは気にしていないようだし、一大決心したかのように構える風でもなく、実に自然体。かえってよけいなことを考えずに、純粹にヒジャーブの良さを感じ、アッラーのことでだけを見ることができのかもしれない。

娘達のヒジャーブ姿の自然な様子にひらめいた。

そうだ、子供の心を学ばないといけない。子供はアッラー以外のものにとらわれていない。

「およそ子供は全てフィトラ(本然の姿)によらないで生まれてくる者はいない。しかし両親が子供をユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、多神教徒にしてしまうのである」というハディースはそういうことかなと思う。

本来子供は純粹にアッラーを見る心を持っているのに、大人が入れ知恵をしてだんだんアッラー以外のことに気を取られ、横道にそれていくような気がする。

人はいつからよけいなもの(アッラー以外のこと)に心がとらわれていくのだろうか。大人になるにつれて処世術を身に付けていき、世間体や常識にしばられていく。世間の人はそういうことを身に

付けることが大切だと言うし、確かに社会の中で、人との付き合い(特にノンムスリムとの)の中でそれらはある程度必要なことかもしれない。しかし、少なくとも信仰においては、今この子供たちのもつ純粹さ(アッラーに向かう心)は大切に守っていかなければと思う。

娘の「何をそんなに心配しているの？」の一言に、“思い煩うな、アッラーに任せよ”と言われていたように感じた。まだ私は“人の眼”を気にしてシルク(偶像崇拜=アッラー以外のものにとらわれること)を犯していたんだと思う。アスタグフィルッラー。

“よけいなことにとられるな、アッラーのみに心を向けよ”。

今回のことでまた子供からタウヒードを学ばせてもらった。

どうかアッラーが子供たちを守ってくださいますように。

・預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに長衣を纏うよう告げなさい。それで認められ易く、悩まされなくて済むであろう。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。(部族連合章 33/59)

・男の信者たちに言ってやるがいい。「(自分の係累以外の婦人に対しては)かれらの視線を低くし、貞潔を守れ。」それはかれらのために一段と清廉である。アッラーはかれらの行くことを熟知なされる。信者の女たちに言ってやるがいい。かの女らの視線を低くし、貞潔を守れ。外に表われるもののほかは、かの女らの美(や飾り)を目立たせてはならない。それからヴェイルをその胸の上に垂れなさい。自分の夫または父のほかは、かの女の美(や飾り)

を表わしてはならない。なお夫の父、自分の息子、夫の息子、また自分の兄弟、兄弟の息子、姉妹の息子または自分の女たち、自分の右手に持つ奴隷、また性欲を持たない供回りの男、または女の体に意識をもたない幼児（のほかは）。またかの女らの隠れた飾りを知らせるため、その足（で地）を打ってはならない。あなたがた信者よ、皆一緒に悔悟してアッラーに返れ。必ずあなたがたは成功するであろう。（御光章 24/30-31）

・アードムの子孫よ、われは、恥ずかしいところを覆い、また飾るために衣装をあなたがたに授けた。だが篤信という衣装こそ最も優れたものである。（高壁章 7/26）

・アッラーのみ使いは「ある者が着用した外衣に得意になり、誇らしげに歩いている間に、アッラーは彼を地中にお沈めになった。それで彼は復活の日まで、ずるずると地中深く沈み続けるのである」と申された。（注）イスラームが教えている謙虚さを実践しない者への戒めの言葉である。（「サヒーフ ムスリム」第3巻 p.187）

・ある婦人が預言者の所に参りまして「私の夫には複数の妻がごぞいます。それで、夫が私にくれてもいないお金（をくれたと偽って）満ち足りているかのようなふりをするのは罪悪なのでしょう

か」と申しました。アッラーのみ使いは「与えられてもない物で、満ち足りているかのようなふりをする者は、ズール（注）の衣服を着用しているような者である」と申されました。（注）ズールは虚偽、模造、見せかけ、ごまかし等の意である。（「サヒーフ ムスリム」第3巻 p.213）

・ウンム・ハビーバ（預言者の妻）は伝えている。み使いは「昼と夜に（ナフルの）十二ラカート（注）を行った者には、天上の楽園に家が建てられるであろう」と申されておりました。更に彼女は「私はそれをお聞きしてからは、けっしてそれを怠ってはおりません」と言った。（注）この十二ラカートは、スナン・ムワッカダのことである。（「サヒーフ ムスリム」第1巻 p.497）

・アブー・フライラは伝えている。私の親友（アッラーのみ使い）は私に三つの事を行うよう勧められた。（それは）毎月三日間の断食、午前中に十二ラカートの礼拝の挙行、夜、寝る前にウィトルの礼拝の励行である。（「サヒーフ ムスリム」第1巻 p.494）

・およそ子供は全てフィトラ（本然の姿）によらないで生まれてくる者はいない。しかし両親が子供をユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、多神教徒にしてしまうのである。（「サヒーフ ムスリム」第3巻 p.582）





「忍耐とは、災難の最初の衝撃をうけた時にあるものである」第3回

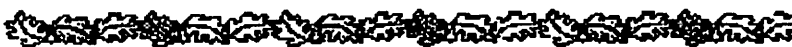
罪に抵抗する時の忍耐

人は、ハラーム（宗教上禁じられているもの）についても同じような忍耐を示さなければならない。罪の最初の段階で忍耐が示されれば、それに引き続いて訪れるべき悪を阻むことができる。預言者ムハンマドがアリーに「一見は良いがそのあとは悪である²」と言われているのはそのためである。つまり、人の目は見てはいけないものを見てしまうこともある。しかし、その瞬間すぐに目を閉じ、顔をそむけるならそれは罪にはならない。さらには、ハラームであるものを見なかったということで善行にも数えられ得る。しかし、もう一度見たり、引き続いて見ていたりすると、それは毒矢のように人の魂に突き刺さり、その心に悪い考えをもたらすことになる。意志の力が失われる。なぜならハラームへの視線はハラームを犯す道への招待状のようなものであるからである。見ることによってもっと見たくなり、人はそれに慣れてしまい、そして後戻りすることが困難な道へと進んで行ってしまうのである。だから、そのような状態に陥る前に、最初の瞬間にそれに耐え、顔をそむけ、目を閉じることが、預言者ムハンマドから我々に勧められているのである。

エピクテトス（哲学者、55～135年）の次のような言葉がある。「悪い考えがあなたの心を捕らえた時は、最初の段階ですぐにそれから遠ざかるように努めなさい。それに導かれて行ってしまうと引き返せなくなる。」この言葉には、神からの知恵が込められている。もし彼が預言者ムハンマド以降に生きた人物であったなら、この考えはムハンマドからのものであると断言できたであろう。

人は、ハラームに対してこのような振る舞いを積み重ねていくうちに、それが彼の性格、特色となってくる。それまでの訓練によってその心に生まれた信仰の光が、地獄の火花である罪に対して防壁となるのである。そうして、ハラームを見ないことはもはや彼にとって普通のこととなるのである。何か状況が起こった時には、自らの心にある信仰の蜜の味のために、その精神状態から遠ざけるような全てのものから逃れようとするのである。このような状態にある人が、意識して罪を犯すことはもはや考えられないのである。

災いにはそれぞれに応じた衝撃がある。それが克服された時、災いは恵みとなり、苦しみは味いに、苦痛も喜びに変わるのである。このような心においてもはや苦しみは治まり、限りない喜びが後に残る。しかし、これらは全て最初の衝撃をうけた瞬間にそれを克服できるかどうかにかかっている。これほど意味深い内容を預言者ムハンマドはほんの数語の言葉で語られているのである。



² Abu Dawud, Nikah



預言者たちの風格:第6回

常に正しい道を勧められた

カアブ・ビン・マーリクは「私は正直に振る舞ったことによって救われた」と述べている。正直に生きることという点で、彼を思い出さないことは難しい。彼は言葉も剣も鋭い人であった。詩人であった。彼の詩は、信仰しない者たちの世界をかき乱すことができた。

彼はアカバで、預言者に忠誠を誓った。従って、マディーナの最初期の人たちの一人であった。しかし、タブークの遠征に加わることができなかった。それは苦しい戦いであり、ほんの一握りの者のみで、強大なローマ帝国軍に対しなければならなかった。しかも砂漠の全てを焼き尽くすような暑さの中での戦いになるはずだった。彼は考えとしてはそこに参加し、勇敢さをみせるはずだった。しかしそれは考えのままどどまった。預言者ムハンマドは、普段は軍事行動を機密にされるのにも関わらず、この戦いではそうされず、公に自らも参加され、また召集された。それなのに、カアブ・ビン・マーリクは参加することができなかった。

ここでは、彼自身の書物の中から、彼が体験したことについて、彼の言葉を引用しよう。

「皆が、遠征に召集された。戦いは困難なものになると見られていたからである。しかし、アッラーはそれを実現されなかった。ただ作戦に沿った進軍は行なわれたが。

皆と同じように、私も準備を終えた。さらに言うなら、それまであれほどいい形で準備を整えたことはなかったのである。預言者ムハンマドは行動に移るよう命じられ、軍隊は動き始めた。私は『どうせ彼らに追いつくだろう』と考え、一緒に出発しなかったのである。他にすべきことがあったわけでもなく、ただ自分自身に対する信用が私を引き止めていたのであった。今日、明日、明後日、と言っているうちに何日も過ぎ、もはや預言者ムハンマドに追いつくことは不可能となっていた。待つしかしょうがない状態になったのである。それで私は待った。一時間が何日にも感じられる思いで、私は待ったのである。

ついに、預言者の帰還の知らせが聞かれるようになった。いつもそうであるように、マディーナは彼の帰還を前に新たな命を得たようであった。皆の顔に笑みが見られた。預言者ムハンマドが戻られるのである……

ついに、待たれていた時が来た。軍はマディーナに戻った。預言者も、習慣として、まずモスクに行かれ、2ラカート（2回）の祈りを行なわれた。それから民衆にお会いになられた。皆それぞれモスクへ行き、礼拝をし、そのお方の元を訪れ、そしてこの遠征に参加しなかった者たちは赦しを乞い始めた。私のような形で参加しなかった者は、多くが正当な理由があったように訴え、また預言者もそれを認められてお

られるようであった。私も、彼らと同じように振る舞うことはできた。なぜなら、私は最も説得力のある言葉を用いることのできる人間の一人であったのだ。しかし、全く何の正当な理由もないのに、そうして預言者に嘘を言うことができようか。私はそんなことはしなかったし、できなかった。預言者ムハンマドは、私の心臓に穴をあけるような苦い笑顔で私を迎えられた。そして『どこにいたのだ』と聞かれた。私は何も包み隠さずに話した。預言者ムハンマドは顔を背けられ、舌の先で『行きなさい』と言われた。

私は外に出た。皆が私を取り囲み、『あなたも何か理由を見つけなさい、それで助かる』と言った。彼らの言ったことは一瞬私の心を捉えた。しかしすぐに我に帰って、私は尋ねた。『誰か他に、私のような状態の人はいますか』彼らはいる、と言い、二人の名前を挙げた。二人ともバドルの戦いに参加した、有名な名譽ある教友に数えられる人たちであった。ムラーラ・ビン・ラビとヒラール・ビン・ウマイヤであった。彼らも、理由をこじつけたりすることなく、真実を話し、私と同じような状態になっていた。待つことしかできない状態になったのである。私にとって、二人とも、従うべき存在の人たちであった。私は彼らがしたようにすることを決めた。正当な理由があると弁解することを断念したのである。

次号へつづく..



レシピコーナー

ハヴチュ・チョルバス (にんじんのスープ)

材料

にんじん	2個	玉ねぎ	1個
バター	20g	水	3.5カップ
砂糖	大さじ1	塩	少々
こしょう	少々	クルトン	適量

作り方

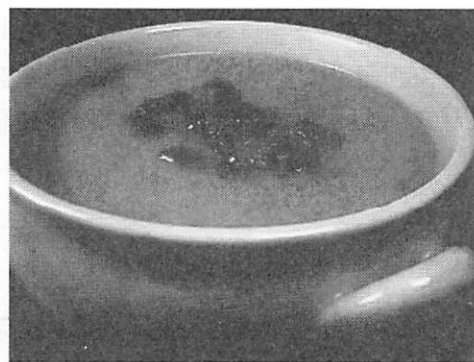
にんじんと玉ねぎを小さく切ります。

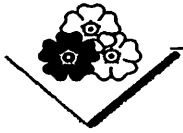
鍋に野菜、水を入れてにんじんが柔らかくなるまで煮ます。

野菜をミキサーにかけてピューレ状にします。

ピューレを鍋にもう一度入れてバター、砂糖、塩、こしょうを入れて5分ほど煮て出来あがりです。

食べる時にクルトンをお好みで入れます。





慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

「時は近づき、月は微塵に裂けた」月章 (アル・カマル)第1節

預言者 (彼に平安あれ) に想いを馳せて・・・

アッサラームアライクム

お姉さん、今日は勉強会に参加しました。友人たちとお話した後、なぜだかわかりませんが、苦しみを伴う、心を揺り動かすような思いにかられました。そしてその感覚はしばらく続きました。少し前イシャーの礼拝をしました。その直後、目の中に輝く光りを感じました。顔を上げ、あたりを見回しました。するとなぞは解けました。輝きの正体は、外からさしこむ月の光りでした。輝く光りを追いながら月をながめると、突然私の目に涙が溢れ出しました。

ところで、この前トルコに行ったときでしたが「聖なる信託」と言われた本が出版されていました。その中にはトプカプ宮殿内に展示されている預言者 (彼に平安あれ) から遺された品々の写真が収集されていました。それを聞いてでも重い (約2キロ) ので買わないで日本に戻ってきました。その本を目にしてでも持って帰られないのもわかっていてわたしはまたまた苦しくなりました。なぜって、私の手元にはその本もありませんし、私にはカーバを訪れる事もまだアッラーから機会が与えられていません。それにもまして、一番私を苦しめた感覚は、嗚呼、私はなんと預言者(彼に平安あれ)から遠いところに存在してるんだろう！そうです、十分に私は預言者(彼に平安あれ)をお近くに感じられないでいる自分に苦悩していました。

ところが、急に時の帳(預言者(彼に平安あれ)との時間的隔たり)がなくなり、月が私の目の前にその美しいがたを現わしてくれました。嗚呼、月よ、我が月よ、その月は預言者(彼に平安あれ)のその聖なる指で2つに割られた月なのですから。そうです、お姉さん、「聖なる信託」は今私の手の中にはありません、残念な事ですが、おそらく預言者(彼に平安あれ)の遺産の何一つも私の手の中にはないかもしれません。おそらくハッジに招かれる事もなく、私は死ぬかもしれません。でも素晴らしい奇跡で役を演じた月が私の遙か頭上に輝いています！おお素晴らしい月よ、おお、いとおいしい愛預言者(彼に平安あれ)よ、お姉さん、あなたとこの喜びをわかちあいたくて、今ペンを取っています。私のこの感激が伝わったらとてもうれしいのですが・・・わかりますか？

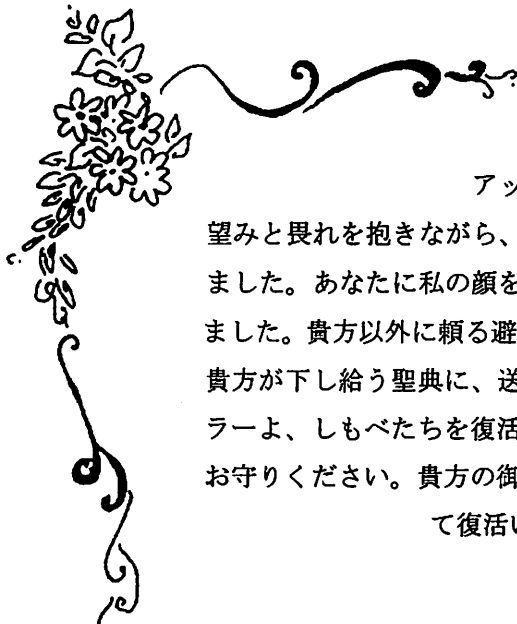
私達は預言者(彼に平安あれ)の御手で頭を撫でていただくことができなくても、ひざを合わせて座りお話しを伺い毎日過ごすことができなくても、彼の指で動き始めた月が目の前にあり、月を見上げ預言者(彼に平安あれ)に想いを馳せ、預言者(彼に平安あれ)を近しく感じる事ができますから、私は今私の心から喜び

に満ち溢れています。わかりますか、お姉さん？

まるで時は超越され、何百年もの間、在り続ける月、その月の光を感じながら、私は心から感謝、感謝の気持ちがあふれ出てきたのでした。

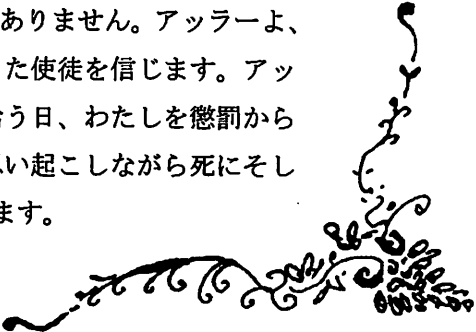
それと私は長い間月は預言者(彼に平安あれ)のその聖なる指で2つに割られたという奇跡を理解するどころかぜんぜん身近に感じる事ができずに生きていました。今回のことで私はさらにクルアーンの言葉に感動してわくわくしてきました。「月は2つに割られた」ということの深さはまだまだきつといろいろあると思いますし、これからそれらをもアッラーの許しがあれば発見できるかもしれません。クルアーンは月のことだけではなく素晴らしい発見に我々を招待しているんだと思って、すごく嬉しいです。

では、またお会いできる事を楽しみに・・・



アッラーよ、

望みと畏れを抱きながら、私はあなたに私の自我を服させました。あなたに私の顔を向け、私は貴方に逃れ避難致しました。貴方以外に頼る避難所はありません。アッラーよ、貴方が下し給う聖典に、送り給うた使徒を信じます。アッラーよ、しもべたちを復活させ給う日、わたしを懲罰からお守りください。貴方の御名を思い起こしながら死にそして復活いたします。





地球の軌道

宇宙での完璧な素晴らしい均衡の最も重要な理由の1つは宇宙にある全ての惑星が決まったルートを歩んでいるという事実です。星、惑星や衛星すべてがそれら自身の軸の回りを回転し、所属するシステムと一緒に同じく回転します。そして宇宙の中をまるで、工場の車輪のように、細かく調整されたルートで移動します。

宇宙にはおよそ2000億の銀河があり、それぞれは2000億の星から成り立っています。これらの星々の大部分が惑星を持ち、それらの惑星の大部分が衛星を持っています。これらの天体物は非常に正確に計算された軌道の上を移動します。今日まで何百万年もの間、それぞれと一緒に完璧なハーモニーと順序で自身の軌道を前方へとまるで「泳いで」います。さらに、多くのすい星が決まった軌道で同じように先に進みます。

宇宙での軌道はただ天体物に存在するだけではありません。太陽系や他の銀河も地球が太陽の周りを回ると同じように動きます。例えば、毎年地球と太陽系は前の年あった位置からおよそ5億キロ離れたところまで動きます。宇宙物理学者たちの徹底的な計算結果によると天体でわずかな逸脱が起きれば、それが全部のシステムの終わりを意味します。例えば、一つの科学的な論文発表では、地球がほんの3ミリその軌道から外れることによる結果は次のように記述されました：

“地球が、太陽の回りを回転する間、18マイル（約29キロ）ごとに、2.8ミリだけ軌道から外れる動きをします。地球の軌道は決して変更することはありません。なぜなら3ミリの逸脱があれば

ば大惨事が起きることになるからです。もし逸脱が、2.8ミリではなくて、2.5ミリだったら、それによって軌道は非常に大きくなり、そして我々のすべては凍結するでしょう。もし逸脱が3.1ミリだったら、また我々が絶滅することでしょう。”^{3*}

全部の宇宙がこのような軌道にのっとって移動しており、そのことはクルアーンに次のように記されています。

「(回転して) 返る天によって、裂け割れる大地によって (誓う)」 (夜訪れるもの章 [アッ・タールク]: 11、12)

もちろん、クルアーンが啓示された当時の人類は今日の望遠鏡あるいは宇宙の何百万キロという距離を観察する進歩した観察技術を持っていませんでしたし、それと同様に物理学あるいは天文学の近代的な知識も持っていませんでした。当時の人間に科学的な論文のように「宇宙は軌道でいっぱいである」と述べることは不可能でした。しかし、クルアーンでは

「おびたしい軌道をもつ天にかけて (誓う)」 (撒き散らすもの章 [アッ・ザーリヤート]: 7)

と宇宙に軌道があることがはっきりと述べられました。これは、クルアーンがアッラーのお言葉であることの数多い証拠の一つです。

³ General Science, Carolyn Sheets, Robert Gardner, Samuel F. Howe: Allyn and Bacon Inc. Newton, Massachusetts, pp. 319-322

一日五回の礼拝の定時 (第4回)

第9のことば〔一日に行なうサラート(礼拝)を5回に定時された理由について説明する〕

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

فَسُبْحَانَ اللَّهِ حِينَ تُمْسُونَ وَحِينَ تُصْبِحُونَ وَلَهُ الْحَمْدُ

فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَعَشِيًّا وَحِينَ تُظْهِرُونَ

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

「それで、夕暮にまた暁に、アッラーを讃えなさい。天においても地においても、栄光は彼に属する。午後遅くに、また日の傾き初めに(アッラーを讃えなさい)」⁴

兄弟よ。あなたは日に五回の祈りの時間がなぜ指定されているのか、それにはどんな英知が含まれているのか、尋ねた。私はそのたくさんの英知の中から、ほんの一部分について述べてみよう。

それぞれの祈りの時間は、地球の公転におけるそれぞれの時間の区分の始まりを示しているのと同時に、神の力と、普遍的な神の摂理の鏡でもある。それで、さらなる賛美でもって全能の神をたたえることが定められている。そして、それぞれの時間の区分の間で蓄積された神への賞賛と感謝で、神をたたえることが定められているのである。それが規定された礼拝の意味である。この、少々繊細で、そして深い意味を理解するために、あなた方は、次の五つのポイントを私自身の精神と一緒に、聞いてほしい。

先月から第五のポイントのつづき

イシャー(夜間の時間)。地平線に残されていたほんのわずかな光も姿を消す。そして夜の世界が世界を包み込む。全能なる偉大なお方、昼と夜を交代させるお方⁵が、昼間の白いページを夜の黒いページへと変えられること、太陽と月を従わせるお方⁶が、夏の間的美丽な緑のページを冬の冷え冷えとした白色のページに変えさせられることを思い起こさせる。

この狭くはかない世界の徹底的な破壊、無残な最期、そして広く永遠なる世界が開かれる時、それは天と

⁵ 参照：聖クルアーン 御光(アン・ヌール) 章24/44 「アッラーは夜と昼を次々に交替させる。本当にこれらの中には、見る目をもつ者への教訓がある。」

⁶ 参照：聖クルアーン 雷電(アッ・ラアド) 章13/2

地の偉大な支配者、美の具現者を思い起こさせる時である。

この世界の所有者、真の支配者、真に愛されるべき、そして崇拜されるべき存在とは、ただ夜を昼に変え、冬を春に変え、この世をあの世に変え、本の一ページであるかのようにそれらを記され、消され、変えることの出来る存在でのみあり得るのである。闇の中で、無力で弱く多くのものを必要としている人の精神は、無限の暗闇に突き入れられ、数知れない事件の只中に投げ入れられ、だからこそイシャールの礼拝を行なうのである。それには、預言者イブラーヒームが **مُكَلَّبُ اللَّيْلِ وَ النَّهَارِ** 「私は沈むものを好みません⁷」

と言ったように、こういった意味があるのである。不滅である、崇拜の対象であるお方、永遠に愛されるお方の宮殿に逃げ込むことを願い、このはかない世、はかない命、そして暗い未来の中において、不滅の存在に救いを乞い願い、彼自身の世界を照らし、未来を明るくし、創造物の消失や友との別離から生じた傷を癒すであろう慈悲深い存在、その光を見ることを望むのである。

そして一時的に彼を忘れ、隠されてしまった世界のことを彼もまた忘れ、彼は神の慈悲の扉の前で涙のうちに自らの苦難をとうとうと語る。そして、死に似ている眠りにおちる前に人は最後の崇拜の義務を行なう。その日の行動の記録をよい形で締めくくるために彼は礼拝に立つ。彼が愛する、はかないもの全ての変わりに、唯一崇拜にふさわしいお方、永遠の生をもたれるお方を、助けを求める全ての無力な存在の代わりに全能で全てをもたれるお方を、そして全ての災いから救われるために慈悲深い庇護者を求め、その御前に立つことを望む。

さらに、アル・ファーティハ章から始めることによって、何の役にも立たない、ふさわしくない装飾や無力な創造物への称賛や恩の代わりに、唯一の絶対的な完全さ、何者をも必要とせず、全てを手に行っている慈悲深いお方である神を称賛し「あなたにのみ崇め仕える」という呼びかけを行なう。自らの小ささ、無力さ、頼りにするものが他にない状態でもって、永遠なる王である「最後の裁きの日の主宰者」に従い、

この世の一時的な客人、そして重要な任務を帯びている立場となり、**إِيَّاكَ نَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ** 「私たちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ乞い願う⁸」とすることによって、全ての創造物の名の元に、この世界の最大の共同体における彼への崇拜と救済への願いを伝える。

さらに、**اهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ** 「私たちに正しい道に導きたまえ⁹」ということによって、将来の暗い闇の中で永遠の幸福へとつながる道である、クルアーンが示す正しい道を行くことを願う。

それから、もはや眠っている植物や動物、隠された太陽、そして星たちがそれぞれ兵士のように命令に従い、またこの世界という客室のランプのようであり、従者のようであることから、この存在の力を思い「ア

⁷ 聖クルアーン 家畜 (アル・アンアーム) 章6 / 76より

⁸ 聖クルアーン 開端 (アル・ファーティハ) 章1 / 5

⁹ 聖クルアーン 開端 (アル・ファーティハ) 章1 / 6

「アッラーは偉大なり」と言い、その御前で頭を下げる。

そして、全ての創造物がいつせいに平伏すことを考える。すなわち、今眼りについた全ての創造物と同様、どの年においても、どの世紀においても様々な創造物、そして大地やこの世界そのものが、それぞれ規律に従う兵士のように、しもべとしての任務を行っていたこの世界から去り、**كُنْ فَيَكُونُ** 『有れ』と御命じになれば、即ち有る¹⁰お方の命令に従って幽玄界へと送られた時、この上ない秩序のうちに別離という絨毯の上で平伏して「アッラーは偉大なり」と祈ったことを考える。また『有れ』と御命じになれば即ち有る」お方からもたらされる復活の知らせと注意を受け、春を迎えると再び現れる。一部は同じ形で、一部は異なるけれど似ている形で復活し、神の命令に従うのである。人もまたこれらに従って無限の完全さと慈悲深さ、無限の美しさと慈愛をもたれる神の前に、驚きを含めた愛情と限りない畏怖の念、謙虚さをもって平伏し「アッラーは偉大なり」ということ、つまり、信者たちにとっての昇天のようであるこのイシャーの礼拝を行なうことがどれほど素晴らしく、どれほどふさわしく、どれほど偉大で味わい深く、またどれほど理にかなった義務、そして奉仕、しもべとしての任務であるか、いかに重要な事実であるか、あなたは理解できるだろう。

つまり、この五回の礼拝の時は、それぞれが大きな変化のサインであり、神の偉大な業の刻印であり、神の恵みの印であり、人々の義務であるファルドの礼拝がこれらの時間に割り当てられていることはまさに神意なのである。

سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ

「あなたの栄光を讃えます。あなたが、私たちに教えられたものの外には、何も知らないのです。本当にあなたは、全知にして英明であられます」¹¹

「アッラーよ。しもべたちにあなたをどのように知るべきか、そしてあなたに対してどのようなしもべであるべきか教えるために、美名に秘められた宝を示すために、この世界の書の通訳者として、そしてしもべとして、神の美をうつす鏡としてあなたが遣わされたお方に、彼の家族と教友たちの全てに祈りと平安がありますように。我々に、男女全ての信仰する者たちに、お慈悲をお与えください。あなたの慈悲を信頼いたします。慈悲深い上にも慈悲深いお方、我が神よ、お認めください。」¹²

¹⁰ 聖クルアーン ヤー・スィーン章36/82より

¹¹ 聖クルアーン 雌牛(アル・バカラ)章2/32より

¹² お祈り、Ibn Maja, Muqaddimah 17



『赤ちゃん泥棒』 Raising Arizona

今月号で『やすらぎ』は3年目に入ります。ずいぶん早いものだなあ、と思う反面、結構長いな、とも思います。雑誌の体裁も多少変わりましたが、内容もコーナーも少しずつ変化があります。ですが、芯の部分、つまり「イスラームの真の姿とそこから得られる“やすらぎ”を伝えていきたい…」という想いは変わっていません。「三つ子の魂百まで」、とでもいいでしょうか、ここまで変わらなかった善い部分はこのままずっと保ち続けていけたら、と思っています。

今月はこの雑誌が「生まれた」月ですから、赤ちゃんに関する映画を紹介します。余談ですが、私の周りでは今年出産をされる方が大変多く、年末には多くの新生児たちに囲まれていることになると思います。そんな幸せに恵まれる人々がいる一方、子供がいくら欲しくても恵まれない人もいます。今回の映画は、そんなあるカップルの話です。

コンビニ強盗常習犯のハイ（ニコラス・ケイジ）は婦人警官エド（ホリー・ハンター）に一目惚れし、何度か入所・出所を繰り返した後には求婚、そして幸せな結婚生活が始まります。しかし、彼らには子供が出来ず、医者にかかるも見通しは暗い。どうしても子供が欲しい彼らは養子を考えもするが、ハイの前科があるため申請は難しいのでした。そんなある日、テレビである富豪（トレイ・ウィルソン）の妻が5つ子を出産した事を知ります。「金持ちの上に5人も子供が出来るとは！」と富豪を妬んだ二人は彼らの子供の一人を盗んで育てようと計画、見事「赤ちゃん泥棒」は成功します。しかし、運悪く(?)ハイの昔の仲間が脱獄に成功し、彼を頼ってやってきたり、赤ちゃんにかけられた懸賞金目当ての男が現れたり…赤ちゃんをめぐり、彼らに様々なトラブルが巻き起こるのでした。

あらすじだけ見ると、単なるドタバタ・コメディーのように見えるかもしれませんが。そういう部分もちろん多いですが、実際はとてもハートフルであたたかい話であり、嫌なシーン（例えば、親と一緒に見られないようなシーン）が一つもありません。これはかなり驚くべき事です。そして全く難しい話が無く、軽快ではっきりした語り口と話の展開で、楽しんでみる事が出来ます。その上、最初から最後まで貫かれる一つの哲学があります。それは「子供はみんなを幸せにする！」という事。それが本当によくわかる話です。強盗だって警官だって、チンピラだって犬だって、赤ちゃんがにっこり笑えば顔をほころばせてしまうもの。赤ちゃんの力はすごいものです。もちろん、人生には子供が不可欠だとか全てだとかいうわけではなく、子供に恵まれないカップルは実際にも多いです、「子供はまだ？」という周囲の言葉に傷つく人もたくさんいます。そんな人たちがいる反面、せつかくの子供を殺したり捨てたりしてしまう親がいるのもまた事実です。欲しくなくても出来てしまったのかもしれないし、子育てに疲れたののかもしれません。

事情は色々だと思いますが、子供を授かるという事は一体どういうことなのか、どんなに大変で恵まれている事なのか、そして世界の未来を担う彼らに愛情を注いで正しく育てる事がどんなに重要な事なのか、ということを考えて欲しいと思います。

ハイとエドのカップルは、結局は子供を授かる事になるのですが、それを知った時エドは「きれいな世界だから、早く産んであげないとかわいそう」というようなことを言います。「この世界はそんなにきれいなものだろうか？」とも思いますが、これは映画の中の話ですから、この映画の中の世界は彼らにとって「きれいな世界」なのでしょう。それを実際のこの世界で言い切れる人がどのくらいいるのでしょうか？むしろ「世界は悪くなる一方だから子供は産まない」と宣言する人もいるくらいの世界です。人の考えは様々ですが、私自身は子供を是非とも「きれいな世界」に産んであげたいと思っています。今現在はきれいではないかもしれませんが、私たちが少しでもきれいだと思える世界にし続ける努力をし、それが子供たちに受け継がれれば、少しずつ世界はきれいになるのではないのでしょうか。また、子供と一緒にきれいにしていくこともできると思います。加えて、ラストの方でハイが夢の中で「親に威厳と知恵があつて、子供たちが幸せになる場所が家だ」というようなことを言います。これは映画の中ですら理想として描かれているものなのかもしれませんが、そんな家がたくさんあるのなら、そこは「きれいな世界」なのでしょう。そんな家、そんな世界が嫌な人がいるのでしょうか？

話は雑誌『やすらぎ』のことに戻りますが、ここまで続けてこられたのはやはり読者の皆様のおかげでしょう。赤ちゃん同様、日々成長していくこの雑誌を、温かく（時には厳しく！）見守り育ててほしいと思っています。これからもよろしく願いいたします。

『赤ちゃん泥棒』 1987年 アメリカ 95分

監督：ジョエル・コーエン

脚本：イーサン&ジョエル・コーエン

出演：ニコラス・ケイジ（ハイ）／ホリー・ハンター（エド）／トレイ・ウィルソン

（ネイサン・アリゾナ）他





イスラームについてよく誤解されることの一つに、イスラームにおける女性の立場は弱いということがあります。立場とはいっても社会的立場、家族における立場と様々ではありますが、そういったイメージを持っている人は少なくないようです。女性の立場を男性と比較して考える時に、この「弱い」とはネガティブな意味ではなく、あくまでもデリケートということなのです。それは女性の「性」に関係していて、女性の身体は男性の身体よりもデリケートに創られているからです。例えば、月経が近づいたとき、または月経中に体調を崩してしまうことがあります。また、女性の身体は赤ちゃんを産むために毎日毎日準備されています。人間のこの世での人生を考えると、子孫を残すという行為はとても大きな仕事に思えます。母親の姿を見ていると、子供を成長させるために働き、家事をし、子供を教育しているという生活が母親の人生そのものです。結婚をして、子供を授かり、それからの人生は子供を育て上げることが人生の最大の目的になっているようにも見えます。男性（夫）には男性独特の責任があります。女性（妻）や、家族を守ることが大きな責任の一つでしょう。そして男性には女性にはない様々な義務が課せられています。例えば、生活費を稼ぐことや、家族を正しい道へ導くことです。義務であるということは、後々、その責任を問われるということです。男性は家族の中で、特別な主導権を持っています。そして家族のまとめ役となっています。家族をどの方向へ導くかの鍵は男性が握っているといっても言い過ぎではないでしょう。それだけ男性の立場は大きく家族に作用します。一般的な意見に、イスラームでは女性の立場を低く見ているということが言われます。例えば、服装に関しても、男性は服装に女性ほど気を使わなくてもよいのに、女性はより気を使わなくては行けないとか、女性ははちいち男性の許可を受けるべきだとかといったことです。男性が女性よりも勝っているとはイスラームでは言うてはいません。ただ、女性にかかる負担を男性がカバーするということが目的であるように思われます。例えば、結婚の際の証人は女性の場合、二人で男性一人分となります。証人にもやはり責任があります。その責任を女性一人に課せるのではなくて、二人で分担するといった意味が含まれています。また、男性は家族を守る義務があります。女性がなにかを決定する時、男性がそれを耳にいれ、二人で決断を下すことは重要なこととなります。服装に関しては、女性は、男性とは違った体のつくりをしており、女性が秩序をもった服装をすることはむしろ自己防衛と考えます。ただし、男性がいかげんではこの論理も成り立ちません。本末転倒となってしまいます。女性も男性を信頼、尊敬できなければ、安心して家族をまた女性自身を守ってもらうことに疑問を感じてしまいます。男性と女性の特徴は異なり、それぞれに適した形で役割や、責任があります。男性も女性も完璧には創られていません。人間はみな不完全です。しかし、努力することに意義があるし、何よりもこの世でよりよい生活を送り、来世への準備をすることが目的となります。ある勉強会では、最初にみんな「死」について想像することから始めます。自分が亡くなった時のことを想像し、この世で何をしてきたのかを自問自答します。一般に「死」とは避けたい話題ですが、この究極の現実に向き合っているのはイスラームです。そのことだけでも、「真実」と向き合っているように思います。人間はこの世に生まれる時にはたくさんの家族や、その他大勢の人々のもとに生まれます。しかし亡くなる時は家族を残し、自分自身と向き合うこととなります。人生を振り返った時、人生の単位である家族がどんなに価値があるものかに気付くでしょう。男性にとっても女性にとっても家族を守ることとは人生そのものではないでしょうか。



我々は完璧な人間になる希望を持っていますがそれに対して弱点が多いのも我々の最も目立つ特徴です。弱点が多いのも完璧を目指すのも特徴というより人間である条件のようなものです。地球もマイナスとプラスの極があるように地球の小さなモデルである人間にもこのような反対の性質を持つ要素があるはずで、人間はその意味を理解し生かすべきです。

完璧を目指しながら、自分に弱点が多いことを理解するのは大切なことです。常によりよく、より美しく、より完璧になりたいという気持ちを持ち、さらに自分が弱いことを知る。礼拝と言う行動にもこの哲学が入り込んでいます。礼拝を完璧にするには自分に弱点が多いと考えて、悟る必要があります。礼拝の中のあらゆる行動は礼拝以外の日常生活のある行動と強い関係を持っています。礼拝のように日常生活も完璧になるためには自分が弱者であることを知るべきです。メヴラーナーがおっしゃったように片足を弱点の所に固定して片足で「完璧」を探していくべきです。

常に完璧になりたいという気持ちがあればそのプレッシャーで少しずつ目標の地点へ達することはできません。どうしても満足できずさらに上を目指していくわけです。それと同時に自分が弱いものであることを知ればやりすぎることを避けることができます。どうしても満足できない理由はもちろん限界のある世界で生きているからです。

「この世界は満足する世界ではない、味見をする世界だ」ということばを考えましょう。人間はこの世界でちょっとした「完璧」を経験することができるかもしれませんが満足できるような生活を得るためには永遠なる世界へ至る道を歩まなければなりません。その道に入るまでにはあきらめてはいけません。完璧を追って、部分的に手に入るとさらに上を目指して追い続けます。この世界で部分的に取得した「完璧」を完全に得るためには永遠なる世界の道に入るのです。このように安定した感覚で進み続けると不満から開放されます。この「味見」の世界で「完璧」を味見できた人は少なくありません。自分の限界を知ることも非常に大切です。

このつかの間の世界では絶対的な「完璧」を得ることはできませんが、自分が絶対的な衰弱を実感できるのです。絶対的な衰弱を感じることによって自分が「不十分な者」であることに気づきます。そこでまず「創造者」との関係と人間関係が大切になってくるのです。次回このことに関して語り合しましょう。



全ては突然に決まった。

2004年の春休み、私は、イギリス・オクスフォードにいる友人に、会いに行けることになった。

いろいろな意味で、イギリスへは、ずっと以前から行きたいと思っていた。自分がいつか留学したいと思って、ずっと興味を持っていたし、友人がオクスフォードへ旅だった後には、ぜひまた会いたい、会いに行きたいと思っていた。また、オクスフォード大学は、イギリス最古の大学として知られるが、そこは、私の大学での指導教授が留学したところでもあった。

願っていたことが、叶うときは、こんなに早いものかと思った。

いろいろなことがあって、突然、私は行くことになったのだった。旅の目的は、友人に会いに行くこと。まずはこれが第一だった。それから、指導教授の知り合いの方に面会してもらうこと、イギリスの（オクスフォードにある）公文教室を見学することも加わった。出発前の諸々の用事は、夢のような感覚のまま、それでもなんとか済ませた。そしてあつという間に旅立つ日が来た。3月8日、私は空港へと向かった。

夫とは、途中の駅で別れた。今回の旅のことを、最初に言い出したのは彼で、いっしょに行けないことをとても残念に思った。寂しさを通り越し、悲しいと思った。

空港行きの電車の車内で、目の前に広がる海にはっとした。良いお天気だった。「天気が良い」ということを、こんなに味わったのは久しぶりの気がした。

修学旅行以来、たった二度目の海外旅行だったので、出発が近づけば近づくほど、不安が募るよう

になっていた。大学生協の格安チケットで、マレーシア航空で行くことにした。席がいっぱいで、行き道はマレーシアで一泊することになった。マレーシアに行き、泊まるということは、全く予期していなかったことで、手続きなどをちゃんとこなせるか不安だった。そもそも、空港の手続きすら、心もとないものがあった。それでも、旅の最良かつ唯一の準備は、アッラーへの畏怖である、という言葉思い出して、心が静まった。

空港に着くと、母と弟が見送りに来てくれていた。ちょっと遅れていたのので、二人に会うとすぐ、私は手続きに走り回った。後は手荷物検査や出入国審査だけということになって、ほっと一息、みんなでお茶を飲んだ。母が、「マレーシアに着いたら食べなさい」と、小さな水筒とお弁当箱を渡してくれた。すでに手荷物はパンパンだったが、なんだか断われず、素直に受け取った。後から振り返ると、あの水筒とお弁当箱ほどありがたいものは無かったと思う。

すぐに時間が経ち、だんだん感傷的になっていく気持ちを抑えて、手荷物検査などの手続きへと向かった。一度入ると戻って来れない入り口だ。「ここからは私しか入れないんだよ。」と母に言った。母は、私が乗る飛行機を見たいと言って、バスに乗ろうかどうしようか、などとしきりに繰り返していた。

母と弟が見送ってくれる中、私は入り口に入ってしまった。ヒジャーブでの海外旅行も始めてだったが、手続きはすべてすんなり終わった。「無事、日本の外に出ましたよっ！」嬉しくなって、私はさつき別れたばかりの母と、夫に電話をかけた。

(続く)



合同礼拝

1) 合同礼拝の歴史： 預言者が合同礼拝を行ったのは、ヒジュラ後です。マッカにおける13年間、彼が合同礼拝を行うことはありませんでした。というのも、当時サハーバ（教友）たちが弾圧されていたという事実があるからです。ですから、彼らは家の中で礼拝を行っていたのでした。預言者はヒジュラ後、合同礼拝を行い、それを続けました。

2) 合同礼拝による効果： イスラームという柱はムスリム同士がお互いに知り合うこと、彼らの兄弟愛、協力のうえに成り立っています。現世がどれだけ、ムスリム同士を引き離しても、1日5回の礼拝を合同ですることによって、ムスリムたちはお互いを隔てる壁をとりのぞくことができます。

3) ムクタディー（模倣する者）の条件

1-ムクタディーがイマームの礼拝の無効を知らないこと、また、そう確信しないこと。

たとえば、二人ともキブラの方角を知らず、それぞれ違う方角を主張する場合、片方は、もう片方について、礼拝をすることはできない。

2-イマームがファーティハを正しく読めず、ムクタディーが読める場合、ムクタディーはそのイマームについて礼拝できない。

3-女性のイマームの場合、そのうしろで男性が礼拝することはできない。

4) イマームが持つべき特質： より法的なことを知っており、よりクルアーンを正しく読む者、よ

り誠実な人、より年配な人。その他のことは問題にはなりません。

5) イクティダー（模倣）の仕方

1-ムクタディーはイマームより前に出ないこと。（女性のイマームは足一歩分だけ前に出る。これは彼女の動きを見るため。）ムクタディーは自分の列に他の人がいない場合、前の列からひとり、引っ張ってくるのが望ましい。引っ張られる人はそのひとに協力すること。

2-イマームの後について礼拝をする。（2つの動き以上は遅れないようにする。）その際イマームより先に動き出さないようにします。

3-イマームの動きを知る。声を聞くか、姿を見る（前の列の）ことができること。

4-モスク以外の場で行う時、イマームとムクタディーの間に大きな壁やドアがないこと。

5-ムクタディーがジャマーア（集団）またはイクティダーを意図すること。これはタクビーラトゥルイフラームのときに行う。イマーム側のニーヤは義務ではない。

* 合同礼拝の徳はイマームがサラームを行う前に礼拝に参加したものにあたえられる。

* イマームがルクウの姿勢の時に礼拝に参加したらそのぶんは繰り返す必要はない。

* 合同礼拝からはなれて一人の礼拝を途中からする場合にニーヤをすること。



「フェトゥフッラー・ギュレンとローマ教皇の会見」を読んで 第1回

Fethullah Gulen and His Meeting with The Pope 雑誌 the Fountain より

教育 - その役割と重要性

ギュレン氏は言っています。「もし大衆の秩序を保ちたいのならば、彼らを知識に対して貪欲にさせなさい、暴君から逃れる唯一の道は知識を得ることです。」全てにおいての平等と正義への道は、正しく十分な一般教育によって容易になるとギュレン氏は信じています。そのとき初めて個人やコミュニティの資



力が高まり、お互いの尊敬と理解を深めることが可能となります。さらにそれがお互いの権利を自発的な応諾によって守られる基礎となるのです。

ギュレン氏は長年にわたって、エリートやコミュニティのリーダー、または優秀な企業家や事業家の方たちがサポートし、お金に余裕のない人々でも質の高い教育が受けられるよう促してきました。

彼の惜しみない努力による教育の推進が今日実を結びはじめています。トルコや中央アジアで彼の影響による寄付金で建てられた私立学校を卒業した子供たちは、大学の共通試験での成績もよく、国際学術オリンピックでは常にトップで、数多くの世界チャンピオンが誕生しています。主な教科としては、数学や物理、化学や生物学などで、最近では1997年の7月にカナダのカルガリーで行われた化学オリンピックでイズミルのヤマンラル高校の化学チームが優勝しました。

ギュレン氏は「一文明国家が無知と自由を期待するのであれば、それは後にも先にも存在しない何かを期待するのと同じです。」と強く述べています。教育という場でのこの原理の意味は、知能から遠ざかるのではなく、お互いの関心と関連を深めるため現代の知識や技術、テレビなどのマスコミュニケーション技術を使って、一般の方やきちんとした教育を受けられない人々に知識を知らせるなどして有効に使うということです。つづく



ハキム・ビン・ヒザムの抑制

ハキムがみ使いのところにきて援助を求めた。み使いは彼に何かを与えた。次にきてまた懇請を始めたところ、み使いは今度も何か与えた。3回目に懇請に来たとき、み使いは何かを彼に与えた後こう言った。

「ハキムよ。銭は砂糖をきせた丸薬のようなものである。それは大変甘いように見える(しかし実際はそうではない)。それを受けたとき心の満足のため、まさに一つの恩恵である。しかし、それを食欲で得た場合は、そこには満足はありえない。」

ハキムは言った。

「おお、アッラーのみ使いよ！私は今後、だれからも決して物乞いいたしません。」

その後アブ・バクルがカーファの位にあるとき、彼は財務部からハキムを援助させたが、彼はそれを断った。またオマルもムミニーン的首領として、ある物を受け取るようたびたびハキムに要求したが、彼はついに承知しなかった。

われわれの欲望はとどまるところを知らない。これがわれわれの得たところのものに対して、恩恵を見出し得ないわけである。



国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部